

## 交差する肖像

肖像。自己言及性について、声高に喧伝する芸術の一ジャンルを展覧会名に掲げた本展では、参加作家である磯邊一郎と水谷一がお互いを作品化するという、きわめて特殊な性格を宿している。特殊な、という表現が正確でないならば、挑発的な、とでもいい替えるべきだろうか。それは、ジャン＝リュック・ナンシーがいう「類似<sup>ルサンプラス</sup>」の、つまりミメシスの論理によって肖像が本質的に支えられているという事実以上に、彼らが互いをみつめる眼差しは、その映し出す作家の像を否応なしに解体し、主体を分裂の状態へと晒そうとすることだろう。一郎と一という単数を名に刻む二人が、肖像の複数性を志向するこの場に居合わせたことが決して偶然でないとするならば、キュレーター清水梓の手腕を、そしてその悪戯に満ちた思惑を、まずは高く評価しなければなるまい。

本展のテーマとは、それぞれのキャリアの中で行きつ戻りつしながら不意に結ばれる交点、そのような類いのものでしょうか。水谷が数年前より始めていた《5 minutes》のシリーズにおいて、5分間ビデオカメラを見つめる人物たちの虚ろな表情は、映像に映る人物の、またそれを見つめる鑑賞者の自己同一性を、焦点を喪失したような互いの盲目的な視線によって、疑義を呈しているかのようだ。それは、鉛筆によるきわめて近視眼的な制作行為で、膨大な面積におよぶ紙をオールオーバーに埋め尽くす水谷の作品の特徴ーロラン・バルトが、サイ・トゥオンブリの<sup>ジェスト</sup>動作を指して「手の欲望」と語ったものだーとも、少なからず重なりをみせている。時に放置された図書室に遺棄された本にラベルを貼り直し、時にビデオカメラをオートフォーカスのまま長時間山林に放置する水谷の表現は、システムに従属することで主体の零度を維持しており、いつも繊細だ。水谷が制作行為を心電図に喩えているように、生理的な拍動の電気信号のごとく、それらの作品は持続性において一つの像を固持することを、主体の側から痙攣的に拒絶している。

磯邊もまた、水谷同様に鉛筆がもつ繊細な濃淡を駆使しながら、無数の記号の集積によって無名性<sup>アノニマス</sup>としての顔を描いていた。しかし、作品に付された《クラスター爆弾》や《リトビネンコ》が指し示していたのは、記号と顔を往還する視覚的な二重像という記号の戯れのみならず、その顔において現代社会との二重化こそが賭されていたことだ。世界地図や戦艦のプラモデルを素材として扱った作品があるように、国家間の境界画定や、その境界自体を浸食する脅威をもつ兵器といった支配を誇示する権力が、象徴的かつ暴力的にそこでは可視化されている。本展で使用されるであろうビデオカメラの視線もまた、管理社会において個人を統制するパノプティコンを、その不可視性によって擬態することだろう。磯邊にとって芸術とは、過剰な記号がもたらす意味と非・意味の絶え間ない攪乱作用としての権力の力能、支配への抵抗であり、実践なのだ。

磯邊と水谷が描く漸近線は、ここでは肖像によって交差するだろう。持続がもたらす複数性において、あるいは分有がもたらす共・存在において。